暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第一七九号〜

小満　五月二十一日

岩井田こまさん

家の歴史というのは、ときに当主よりもその妻によってわかることがあります。女性が家を仕切り、暮らしに関わりが深いからかもしれません。

明治四（一八七一）年の神宮改革によって廃業を余儀なくされた御師は、伊勢の地を離れて生計を立てた人、旅館業や新たな事業を始めた家などさまざまでした。内宮の御師、岩井田家は、旅館業のほかに皇學館大学の学生の下宿先となっていました。当時、皇學館は岩井田家に近い、現在の宇治工作所にあり、その学生をもっぱら世話したのが十四代当主の妻、こまさんだったのです。岩井田家にはこまさん宛ての手紙が多く残り、その内容から親身になって世話をしていたことがわかりました。

岩井田家未公開資料特別展「舘町の御師」では、昭憲皇太后の神宮親拝を寿ぐ学生の和歌や、保証人となった学生の自主退校を知らせる通知のほか、皇學館火災にあたっての火事見舞い状は学生だけでなく卒業生の保護者からのものも。卒業後も付き合いが続いていたのです。

じつは私の津の実家も三重大学の学生の下宿先として、代々のラクビー部の主将、副主将を受け入れていました。明治生まれの祖母がなにくれと世話を焼いていたようで、卒業後も付き合いがあり、祖母の葬式に遠方から卒業生が来てくれたほどです。現代の下宿とは違い、一緒に食事もし、買い物にも連れて行っていたようですから、家族同然の付き合いがあったのでしょう。

こまさんの紋付姿の写真を拝見すると、毅然とした佇まいは、どこか祖母と似ているように思いました。学生に慕われた下宿先のおばさんはかつてはどの町にもいたようです。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁